

船曳由美さん

(作家・編集者)

百年前の暮らしに見る日本の原風景

米作りと養蚕にこそむ北関東の農村には、四季折々の年中行事に彩られた、豊かな暮らしが息づいていた。どこか懐かしい、でも私たちがいま見失っている、日本の原風景。母から娘へと伝えられた明治末からの記憶を本にした、船曳由美さんに話を聞いた。

聞き書きをもとにお母さまの少女時代を描いて二〇一〇年に上梓された『二〇〇年前の女の子』（講談社）が、このほど文庫化（文春文庫）されました。

おかげで、多くの方に手にしていただきやすくなりました。加筆した足利高等女学校時代の章をはじめ、少女時代や寺崎一族、両親の結婚式など、今回新たに入れた写真も好評です。刊行の半年後に逝った母の姿もあとがきで触れられました。安野光雅先生にお願いした表紙も、銀杏の大木に登った無邪気な少女を描いて、果たせなかった母の夢が見事に叶えられています。——これまでずっと編集者として、ほかの方が書いた

本を出版する側だった船曳さんが、どうしてご自身で本を書こうと思ったのですか？

母は明治四十二年（一九〇九年）の生まれで、栃木県足利郡にある高松村という農村で育ちました。姓は寺崎、名はテイ。出産で実家に戻ったテイの母親は、生後一カ月の赤ん坊を婚家に送り届けたまま戻らず、テイは生涯、百一歳で亡くなるまで実母に会えずに過ごします。あちこちに里子や養女に出されたつらい記憶も封印してきたのですが、米寿を過ぎた頃から、堰を切ったように自分の生い立ちを話し始めたんです。歳をとって、こらえ性がなくなってしまうのかも。

「私にはおっ母さんがいなかった」という台詞、たぶん一万回ぐらい聞かされたんじゃないかしら（笑）。

娘として、いつも胸が締め付けられるような思いで聞いていましたが、母が語る高松村の四季折々の暮らしぶりがとても興味深くて、これは本の形で残しておかなければという気持ちがいよいよ強くなりました。

——お話は、メモをとりながら聞いたのですか？

まさか！ 私にしがみつくようにして話すので、メモなんかとれません（笑）。庭の木々に夕陽が当たる時間になると淋しさがつのるらしく、「母恋い」のつらい話が始まります。気をそらそうと、「そのとき、

お月見のお団子はどうしたの？」などと聞くと、気持ちそつちに流れてずいぶんしゃべってくれる。驚くほど記憶は鮮明で、音や匂い、会話のトーンまで、何度聞いても細部まできっちり再現できるので、そうやって毎日、少しずつ話を聞いていきました。

——物語の舞台となった高松村ですが、どんな土地柄なんですか？

栃木県の東南端、足利市の一角ですが、群馬県の館林市にほど近い、小さな集落です。住民は「高松村」と呼んでいます。行政的には当時の足利郡筑波村の「大字高松」でした。利根川と渡良瀬川にはさまれた平らな土地で、暮らし向きは米作りと養蚕で支えられています。寺崎の家は村の北の奥まったところにあつて、村道から七十メートルほど延びる私道の先に母屋があります。この私道は「街道」と呼ばれていて、両側には野菜畑や茶畑、桑畑が広がっていました。

——この街道を通して、村人だけでなく、さまざまな「他所者」が寺崎家を訪れますね。

村には日用品だけの小さな店しかないので、冬の農閑期になると、女たちが心待ちにしている行商の小間物屋や寒紅売り、富山の薬売りなんか、村人にとつ



●ふなびき・ゆみ 作家・編集者。1938年東京都生まれ。62年に平凡社入社後、雑誌『太陽』の創刊にかかわり、全国各地の伝統行事や民俗を取材。のちに集英社を経てフリーに。